みんなで持ち寄る

シレトコのコト レポートブック

知床の価値を未来へつなぐ物語

知床 インタープリテーション全体計画：知床の価値を未来へつなぐ物語

シレトコのコト のコト

環境省では、国立公園の豊かな自然を保全しつつ、その魅力を広く伝えるため、国立公園のブランディング事業を進めています。この取り組みの一環として、全国の国立公園で、その土地固有の自然や文化の価値を、訪れる人に楽しく、そして分かりやすく伝えるための羅針盤となる「インタープリテーション全体計画」の策定が進められています。

この度、世界自然遺産である知床国立公園とその周辺部においてもインタープリテーション全体計画を策定することになりました。本計画では、知床の潜在的な価値を裏付ける物語を紡ぎ出し、その物語を、地元の人たちが来訪者に対して価値を伝えるための「教科書」として活用することを想定しています。例えば、観光施設で働く人々が知床の魅力を伝える際のガイドラインとしたり、新たな観光施設を整備する際のヒントにしたりと、多様な活用を見込んでいます。

この物語の活用によって来訪者が知床の価値をより深く理解し、体感し、気づきをもって帰ってもらうこと「橋渡し役」を担うことを目指しています。

2024 年には、この物語を紡ぐために、知床の資源や価値を改めて見つめ直し、可視化するワークショップを 3 つのエリアで 3 回ずつ開催しました。地域で生まれ育った地元の方々、観光業を営む方々、そして知床へ移住してきた方など、多様な背景を持つ多くの人々にご参加いただきました。

このレポートブックでは、ワークショップの様子とその貴重な成果をご紹介します。
知床の未来につながるストーリーのたまごが、ここから生まれています。

ワークショップの流れ

1 STEP 知床の魅力を思いつくだけ意見交換

「他地域にない特別なもの」「大切にしたい特別なもの」をテーマに知床の特徴的な資源や、その価値を明確化していきました。

2 STEP STEP 1の振り返りと追加の議論

抽出された価値をカテゴリごとに分類し、整理、集約しました。また価値を体験できる具体的な場所についても議論しました。

3 STEP 知床の魅力を言語化し、短いストーリーを作成

「流氷から始まる命の循環」や「火山が生み出した奇跡のアクティビティ」など、知床の魅力を端的に伝える文章が完成しました。

3 つのエリア

ワークショップ
レポート
in ウトロ

ウトロ地区にお住まいの方、勤務されている方、移住して間もない方など、さまざまな立場の方々にご参加いただきました。
「自然とともに暮らす」という日常が、そのまま観光資源になりうるという視点が多く共有されました。特に 自然・文化・暮らしの三要素が重なり合い、生活の中に物語が息づいていることが再確認されました。

第 1 回
2024/11/25

「大切にしたい特別なもの」や「他地域にはない特別なもの」を見つける

日本一のサケの町!

漁師の仕事の様子をこんなに間近で見学できて、水揚げの様子を上から見られる場所は他にない

動植物の多様さ!

写真や映像に収めたいものが多すぎて飽きない!

景色や地形、命の始まりから人の生活や開拓の歴史まで、すべてがつながっていて語れる場所

➡ **当たり前だと思っていたけれど、外から見たら貴重だったんだ!**

➡ **私たちの日常は、地域の外の人たちから見たら非日常なんだね。**

第 2 回
2024/11/25

「伝統・文化・歴史」「産業・暮らし・食」「自然」「地理・地形」のストーリーテーマを考える

伝統・文化・歴史
…しれとこ 100 平方メートル運動

自然
…サケを起点とした豊かな生態系

地理・地形
…火山と流氷という“Fire and Ice”の自然環境

産業・暮らし・食
…サケの漁獲量が日本一の町!

なぜ、これが魅力的なのかな?

第 3 回
2024/11/25

" 訪れた人に伝えたい "　" ウトロのストーリー " をつくる

100 平方メートル運動　伝統・文化・歴史チーム

経済優先の時代に、「自然は元金で観光は利息」との考えから乱開発を止め、全国に波及した運動が知床にあった。
クラウドファンディングの元祖ともいえる運動は、サステナブルな観光＝エコツーリズムを見据えていた。
寄付を通して知床に夢を託した人々の想いは、今も森と共に刻まれている。今の知床があるのは、この運動のおかげ。

カムイワッカ湯の滝　地理・地形チーム

火山活動による強酸性の硫黄成分が流れ込んだ川は、太古から人々に自然の恵みを与えてきた。
世界的にも珍しい温泉があり、世界遺産エリアの中でも数少ない「水辺で遊べる」特別な場所。
自然の雄大さと、その恵みに気づくことで、人と自然が一体となる体験ができる秘境。

ワークショップ レポート in 斜里

地元の高校生や漁師、ガイド、地域おこし協力隊など、さまざまなバックグラウンドを持つ方々が集まりました。地域に根ざした多様な知識と経験を持つ皆さんだからこそ知っている「知床の魅力」を再発見することができました。そして、魅力をストーリーとして表現するための「要素」をたくさん見つけることができました。

第１回　「知床で大切にしたい特別なもの」や「他地域にはない特別なもの」を探す

2024/11/25

家の裏にエゾシカやキツネがいて、野生動物が身近

流氷が見えるスキー場は知床にしかない！

なんと言っても食べ物が美味しい！

ねぷた祭りがとても魅力的！

第２回　「伝統・文化・歴史」「自然」「産業・暮らし・食」のテーマを深める

2024/11/25

自然

…海から山への凝縮された自然と豊かな餌資源が、ヒグマにとって快適な環境を作り出している

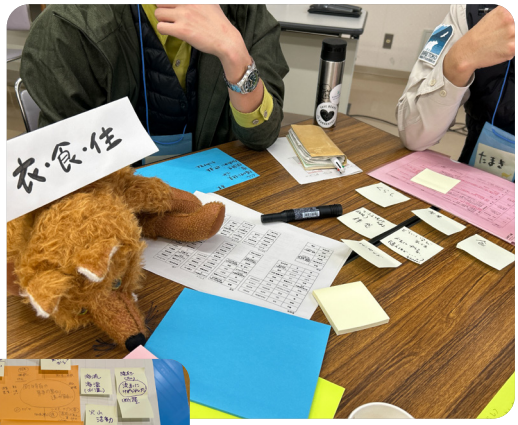
火山活動や流氷によって形成された特徴的な地形と気候が、豊かな自然のサイクルを生んでいる

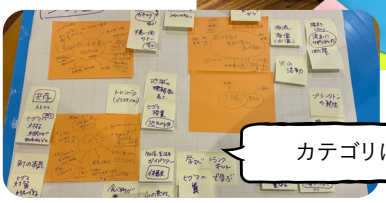
産業・暮らし・食

知床の魅力は四季を楽しめること。自然のサイクルで暮らしが成り立っており、その季節ごとの楽しみ方を観光客にも味わってほしい

伝統・文化・歴史

…しれとこ斜里ねぷた





カテゴリに分けて、価値を深堀りしてみました

第３回　＂旅行者の記憶に残る＂　＂斜里のストーリー＂をつくる

2024/11/25

衣食住 / 四季　自然

やっぱり知床の自然といえば“流氷”

「流氷が命をつなぐ」
「流氷がすべてのはじまり」
「流氷を通じて、生態系の一部であることを実感する」

衣食住 / 四季　伝統・文化・歴史

知床の地名“シリエトク（大地の突端部）”や斜里の“シカル（葦の生えているところ）”など、地名からもアイヌ文化の歴史が感じられる。

「自然や野生動物と向き合いながら『語り継ぐ』ことでつながれてきた人々の歴史がある」。暮らしの中には、自然と調和した知恵と工夫が息づいている」
「海から陸を見れば、雄大な自然だけでなく、かつてここで生きた人々の息づかいと歴史が感じられる」

自然　産業・暮らし・食

農業や漁業など第一次産業を担う人々の顔が見えることこそ、知床の魅力

「知床はサケが全ての基点。人間は漁業で、動物は食物としてサケを通じて生きている」
「一つの町に複数の港があるなど、漁獲区域が広く、漁獲量も多い」

ワークショップ
レポート
in 羅臼

根っからの羅臼っこ、移住してから既に故郷よりも長く羅臼に住んでいる方、今年羅臼に越してきたばかりの方、漁師、猟師、観光船事業者など、仕事も立場も多種多様な皆さんが集まりました。知床の「海のまち」としての羅臼が持つ豊かな自然・文化・暮らしの資源やその価値が、参加者自身の言葉で再発見されました。

第１回
2024/11/25

これぞ!という「知床ならではの魅力や自慢」を見つける

国後島から昇る朝日が、例えようもないほど美しい!

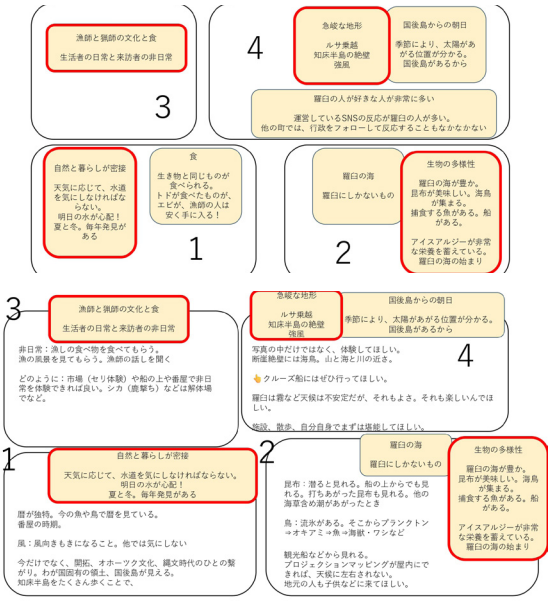
地元の人たちと仲良くなれる「熊の湯」って最高!

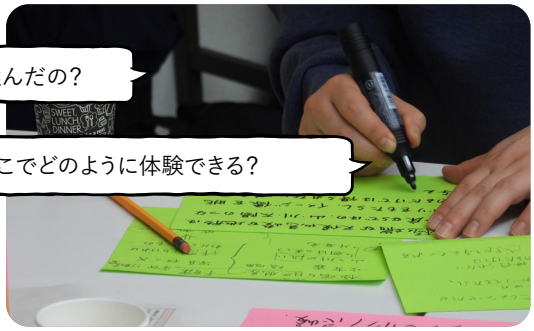
季節ごとに多様な海の生きものに出会えるすごい場所

厳しい自然の中で生き抜く力

第２回
2024/11/25

「自然と暮らしが密着」「漁師と猟師の文化と食」「生物の多様性」「急峻な地形」のテーマを掘り下げる

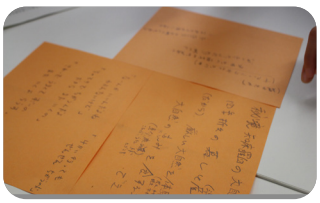




なぜそのテーマを選んだの?

具体的にどこでどのように体験できる?

第１回で出たキーワードを基に、各班がテーマを１つに絞り、意見を交わしながら理由や伝え方を整理していきました。



第３回
2024/11/25

" 地元住民 " と " 来訪者 " 両方の視点を意識して、短いストーリーをつくる

衣食住 / 四季 **自然と暮らしが密接**

オホーツク文化から変わらず続く暮らしと、厳しい自然と複雑な地形が育てる海と山の食材。その時々を楽しめるところ。だから、また行くの。

伝統文化 **漁師と猟師の文化と食**

漁師と猟師が潮の匂い、血の匂いにまみれ、それを生業として生きている。そこには長い時間をかけて紡がれてきた誇りがあるから。羅臼に滞在することで、命を五感で味わうことができる。

自然 **生物の多様性**

自然の王者が集う、世界に誇る豊かな生態系の循環の中で、自分を知り、生の実感を得る。

地理地形 **急峻な地形**

ルサの強風のような極端な天候と、海と川が近い特徴的な地形がある。そこに直接足を運び、自分で体感したものは、写真や絵を眺めるだけでは得られないものだ。

全９回のワークショップから生まれた「知床ならではの価値を伝える」

4つのテーマと、9のたまご

産業・暮らし・食

地理・地形

自然

伝統・文化・歴史

1 知床には、流氷からはじまる命の循環、流氷が繋ぐ命がある

In Shiretoko, the cycle of life begins with drift ice;
its life interconnects life and ecosystems

シベリア海岸のアムール川河口で生まれた流氷は[i]、季節風や海流にのって[ii] 1,000km 以上も離れた知床に毎年やってきます。知床は流氷が見られる南端の地[iii]でもあります。そんな流氷は知床の人々の生活の一部となっていて、季節の移り変わりを知らせてくれたり[iv]、潮の干満や天候により日々違う顔を見せてくれたりします。さらには、「流氷体験ツアー」などのアクティビティを通じ、人々は流氷と直接触れ合い、流氷を体感することもできるのです。

流氷は、知床の海・陸の生態系のつながりの源となっていることも忘れてはいけません。流氷が着氷している時期は、漁師も漁に出ることは出来ませんが、漁師は「流氷の時期は海を休めて海を豊かにする時期」と言います。それは、流氷の下で資源が保護されるとともに、流氷によって大量の栄養が運ばれてくる[v]からなのです。流氷の中に閉じ込められていた植物プランクトンが春になると大増殖し、それをエサにする動物プランクトンが大量に発生します。今度は、これを食べるために魚たちが集まってきて、その魚を求めてアザラシやトドがやってきます。そして、生態系のトップに君臨するシャチがあらわれます。このように知床の海には流氷を起点とした食物連鎖が形成されている[vi]のです。

また、流氷は海の生物だけでなく、陸の生物の命も育んでくれます。豊かな海の栄養で育ったサケ・マスは海から川を遡り、ヒグマや、オジロワシ、シマフクロウなどの猛禽類の重要な食物資源[vii]となります。これらの動物たちの糞などは、今度は土に還り、森の栄養分となり[viii]、最後は雨水とともに海に戻っていきます。

このように知床では海 - 川 - 陸にわたる流氷で始まる壮大なストーリーがあるのです。

i 菊地慶一 (2004)「流氷 ~ 白いオホーツクからの伝言」響文社 . p.56-62.
ii菊地慶一 (2004)「流氷 ~ 白いオホーツクからの伝言」響文社 .p.61
iii同上
iv 知床斜里町観光協会 (2000~「流氷体験」(https://www.shiretoko.asia/list/drift_ice_experience).
菊地慶一 (2004)『流氷 ~ 白いオホーツクからの伝言』響文社 .p.242
v菊地慶一 (2004)「流氷 ~ 白いオホーツクからの伝言」響文社 .p.276
斜里町立知床博物館協力会 (1994)『知床の人と自然』郷土学習シリーズ 17 斜里町立知床博物館協力会 . p.23.
vii 斜里町立知床博物館協力会 (1994)『知床の人と自然』郷土学習シリーズ 17 斜里町立知床博物館協力会 . p. 23.
viii 中川 元 (2006)『世界遺産知床がわかる本』山口昭男 p.124-128.

※ウェブサイトの参照日時：2025 年 3 月（以降の頁も同様）

2 火山が生み出した奇跡のアクティビティ「カムイワッカ湯の滝登り」

Shiretoko’ s unique, miraculous activity born from a volcano:
"Kamuywakka Hot Falls Climbing"

知床半島の火山活動が造り上げた知床連山[i]の一角の硫黄山の麓には、アイヌ語で「神の水」[ii]を意味するカムイワッカ湯の滝があります。ここを流れるのはただの水ではありません。知床硫黄山から湧き出る硫黄を含んだ強酸性温泉水[iii]、まさに名前のごとき「神の水」が流れてくるのです。

カムイワッカ湯の滝では、魚やコケも生きていくことのできない強酸性[iv]の温泉水を肌で感じながら、この奇跡の滝を一歩一歩登っていく沢登りを楽しむことができます。川を登るにつれて温度が上がっていき、最終目的地の「4 の滝」では 35 ～ 40℃[v]という絶妙に気持ちの良い温度になる不思議な川です。

カムイワッカ湯の滝登りは、単なるアドベンチャーアクティビティではなく、世界にも類まれなユニークな体験であり、まさに地球のチカラを体感しつつ学ぶことのできるアクティビティと言えるのではないでしょうか。

i 知床ライブラリー 8(2007)「知床の地質」斜里町 斜里町教育委員会 p.152
ii斜里町立知床博物館協力会 (1984)「知床半島西岸の地名と伝説」郷土学習シリーズ (6) 斜里町立知床博物館協力会
iii斜里町立知床博物館協力会 (1997)「知床の温泉 知床博物館特別展示図録第 19 回」p. 5.
iv 斜里町立知床博物館協力会 (1997)「知床の温泉 知床博物館特別展示図録第 19 回」p. 8
v斜里町立知床博物館協力会 (1997)「知床の温泉 知床博物館特別展示図録第 19 回」P. 5-6

3 クラウドファンディングのはしり「しれとこ 100 平方メートル運動」

The birth of crowdfunding: the "Shiretoko 100-Square-Meter Movement"

知床には、原生的な自然が残されている[i]と言われています。でも、それはたまたま残っているのではなく、我々の先人たちの自然に対する敬意と畏怖により、残されたのです。その代表的な取り組みが 1977 年に始まった「しれとこ 100 平方メートル運動」[ii]です。

日本全国が土地への投機ブームで湧く中、その波は知床の地にもやってきました。開拓跡地が不動産業者などの手に次々と渡り[iii]、知床も乱開発による自然破壊の危機に瀕しました。それに対して知床では、漁師を中心として「森を豊かにすることで、海が豊かになる」[iv]と考え、また、当時「知床の自然は元金で、その利息で観光が成り立っている。だから、元金を減らすようなことをしてはいけない」と考えるなど、今で言う「持続可能な資源の利用」、「持続可能な観光」という考えが既に地域に根付いていた様子がうかがえます。

こうしたことを背景として、当時の藤谷豊町長は、イギリスのナショナル・トラスト運動になぞり、全国に呼びかけて 100 平方メートルの土地を買い上げるための寄付金を募る活動「しれとこ 100 平方メートル運動」をスタートすることを決意した[v]のです。まさに今のクラウド・ファウンディングのはしりと言えるかもしれません。

「しれとこで夢を買いませんか」のキャッチフレーズで土地の買い取りや植樹費用等にあてる寄付を募った結果、この運動は自然保護に関心を持つ全国の人々の共感をよび、全国各地から寄附金が寄せられました。

全国の人々の想いは受け継がれ、現場のスタッフはもちろん、ボランティアの方々、地域の人や大学の科学者の方々の力と知恵を借りながら、今も原生の森の復元のための活動が進められています[vi]。[vii]

i 斜里町立知床博物館 (2010)「知床の自然保護 しれとこライブラリー第 10 巻」北海道新聞社 p. 184.
ii斜里町 (2010)「報告集 知床 100 平方メートル運動の記録」/
斜里町立知床博物館 (2010)「知床の自然保護 しれとこライブラリー第 10 巻』北海道新聞社 p.200. / 斜里町立知床博物館協力会 (1994)「知床の人と自然郷土学習シリーズ第 17』斜里町立知床博物館 .p.62~.
iii菊池慶一 (2005)「もうひとつの知床 ~ 戦後開拓ものがたり ~」北海道新聞 . p.175.
iv 辰濃和男 (2010)「よみがえれ知床 100 平方メートル運動の夢」朝日新聞出版 .p.22.
v菊池慶一 (2005)「もうひとつの知床 ~ 戦後開拓ものがたり ~」北海道新聞 . p.45.
または :
藤谷豊 (1978)『知床の町で ~ 斜里町長の手帳」毎日新聞 . p. 370.
vi菊池慶一 (2005)「もうひとつの知床 ~ 戦後開拓ものがたり ~』北海道新聞 . p. 57.
vii 斜里町立知床博物館 (2010)「知床の自然保護 しれとこライブラリー第 10 巻』北海道新聞社 p.213.

4 知床では先人たちの「ロマン」の軌跡を辿ることができる

In Shiretoko, you can follow the footsteps of those who came before us, and feel the “adventure” of their lives

知床は、地理的に見ても北海道の東の果ての地であり、また、冬には寒さ、雪、強風などの厳しい自然環境にさらされます。[i]しかしながら、知床では大昔から人々が住み着き生活をし、様々な歴史を積み重ねてきました。

知床半島にあるカメのような形をした大きな岩、チャシコツ岬上遺跡には、今から 1200 年ほど前、8 ～ 9 世紀のオホーツク人の集落跡があります。オホーツク人は、その遺跡からも、海獣狩猟や漁労を中心とする生活[ii]を送っていたものと考えられています。

また、知床の語源はアイヌ語の「シリ・エトク（地の突き出たところ）」[iii]であるように、知床には現在でも多くのアイヌ語由来の地名が残り[iv]、アイヌ文化の跡を感じることができます。そして、知床にはキムンカムイ（ヒグマ）、コタンコルカムイ（シマフクロウ）、レプンカムイ（シャチ）などのアイヌ語の「カムイ（神）」がたくさん存在し、アイヌの人々が知床の動物を崇めながら生活していたことがうかがえます。

斜里で毎夏行われる「ねぷた祭り」は、これらと全く違った形で歴史を感じることができます。今から 200 年ほど前に、北海道周辺に出没するロシア船に備え、幕府から斜里での警備を命じられた津軽藩士が、この地で飢えと寒さにより死亡した事件が起きました[v]。その後、斜里で津軽藩士の慰霊が続けられてきた[vi]ことが縁となり、「ねぷた」の本場である弘前市から斜里に伝授されたのが「斜里ねぷた」[vii]なのです。

このように、知床では、知恵や努力で生活を切り拓き、力強く生きてきた人々の軌跡を色々なところで見ることができます。

i 斜里町立知床博物館協力会 (1985)「知床の気象」斜里町立知床博物館 p. 12-32.
ii斜里町立知床博物館協力会 (1998)「知床の海獣狩猟」斜里町立知床博物館 . p. 8-11.
iii村田良介 (2023)「点から線へ、そしてゾーニングへ」「日本の世界自然遺産 30 年 自然保護と暮らしの両立モデルへ（ビオシティ 96 号）」ブックエンド .p.26-35.p.26.
iv松浦武四郎著 ; 秋葉實解読 (1994)「松浦武四郎 知床紀行集」斜里町立知床博物館協力会 .
v斜里町立知床博物館協力会 (1981)「斜里一下町の歴史散歩」斜里町立知床博物館協力会 . p. 10.
vi竹富町・弘前市との交流を進める会 (2025) [自然と歴史が結んだ絆一竹富町 弘前市と斜里町との交流の歴史 , p.36.
vii 同上 .

5 漁業、農業を担う人々の顔が見えるまち「知床」で味わう最高の贅沢

Savor supreme luxury in "Shiretoko" –
A town where the people who pursue fishing and farming are familiar faces.

知床・斜里町は、オホーツク海の恵みにより、サケ・マスをはじめとした豊富な水産資源を誇り、漁業がとても盛んなまち です。[i] 2023 年のサケの漁獲高が日本一、しかも 20 年もの間、2021 年をのぞいて1位の座をキープ [ii] しています。また、かつて知床の開拓にあたった先人の知恵や努力のおかげで、ジャガイモ、ビート、ニンジンなど農業もとても盛ん [iii] です。このように、知床は、日本にとって重要な食料生産基地の 1 つなのです。

こうした漁業、農業を担う生産者の人々の「顔が見える」ということも知床の大きな特徴です。

ウトロ漁港では、大量のサケが積まれた漁船が戻ってくると、水揚げと選別作業が始まります。成熟度やサイズ、オスかメスかなどが漁師によって素早く判断され、[iv] 右に左に振り分けられていきます。「ウトロ鮭テラス」[iv] では、その迫力あるスピーディーな作業現場を、2 階の見学スペースで真上から眺めることができます。大きなものでは 3-5 kgにもなるサケ [v] をあっという間に選別して魚箱へと収めていく様は、迫力満点で 1 時間眺め続けていても飽きません。

一方、道路を車で走っていると、その車窓からは広大な斜里平野に広がる美しい農地で作業する農家さんの姿が見られます。ジャガイモの花で埋め尽くされる畑や、収穫間際の金色に光る麦畑 [vi] などは、知床の大地を鮮やかに彩ってくれます。

町内にあるスーパーでは、収穫時期になると知床で獲れたジャガイモがならび、小麦やニンジンは加工品を買うことができます。知床のニンジンで作るニンジンジュースは、斜里産ニンジン 100%にほんの少しのレモンを入れただけ [vii] の一品で、ニンジン嫌いの人も大好きになるという、地元にも観光客にも評判のジュースです。

また、スーパーの魚コーナーでは、その時の旬な魚がきれいにパックされて並びます。付けられた値段によって、たくさん獲れているのか、不漁なのかが分かるのも、地元ならではです。このように、海産物も農作物も、旬なものを、最高の瞬間に手に入れ、味わうことが出来るのが、ここ知床なのです。

i 斜里町立知床博物館協力会 (1992)「ウトロの自然と歴史」斜里町立知床博物館協力会 p.22-25.
斜里町立知床博物館協力会 (2001)「知床の漁業」郷土学習シリーズ 14 斜里町立知床博物館協力会 p.3.
ii斜里町公式ホームページ (2024)「広報しゃり 2 月号」(https://www.town.shari.hokkaido.jp/material/files/group/3/202402a4.pdf).
iii斜里町立知床博物館協力会 (1992)「ウトロの自然と歴史」郷土学習シリーズ 14 斜里町立知床博物館協力会 p.28.
iv 斜里町公式ホームページ (2020)「広報しゃり 10 月号」(https://www.town.shari.hokkaido.jp/material/files/group/3/koho202010a4.pdf).
v国立研究開発法人水産研究・教育機構ホームページ「SALMON 情報 NO.6」(2012 年 3 月) chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpeglclefindmkaj/https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/book/salmon/files/srr006_p22-25.pdf
vi斜里町公式ホームページ (2024)「斜里町について (産業)」(https://www.town.shari.hokkaido.jp/soshikikarasagasu/seisakusuisin/miryoku/ijujoho/sharichounogaiyou/1204.html).
vii 知床しゃりブランド (2025) にんじんジュース」(https://www.shiretoko-gourmet.com/product_ninjin_juce.html).

6 陸の王者ヒグマ、海の王者シャチ、空の王者オオワシ、自然の王者が集う知床。
流氷から始まる豊かな生態系の循環のなかに、来訪者は身を置くことで、人間も自然のサイクルの一部ということを再確認し、自らを知り・生の実感を得ることができる。

In Shiretoko, the kings of nature gather: the brown bear, lord of the land; the orca, commander of the sea; and the Steller's sea eagle, ruler of the skies.
Here, visitors can immerse themselves in the diverse ecosystem which starts with the drift ice, and reaffirm that humans also form part of the grand cycle of life; they will gain insight into themselves and a more authentic appreciation of life.

知床では、流氷がもたらすアイスアルジーから始まる、豊かな自然の恵みのサイクル[i]が存在します。植物プランクトン→動物プランクトン→魚→海獣類やワシ類などという食物連鎖[ii]が繰り広げられ、その頂点にはヒグマやシャチ、オオワシ[iii]が君臨しています。沖合10kmまでの範囲で、多様な動物、例えばアホウドリやイシイルカ[iv]が見えたり、陸では希少な猛禽類であるシマフクロウやヒグマなども時には見る[v]ことができます。知床、羅臼町では陸海空の生態系の頂点に立つ生き物、すべてを見ることができます。また、深海魚の新種がいくつも発見される[vi]など、未だによくわからないものが日々、知床の海では出てきています。

知床の海で繰り広げられる多様な生物の世界は、バリエーションに富んだ魚のどれもが美味しいことや、羅臼昆布が日本三大昆布の一つという味覚の話にひろがったり、あるいはクジラやシャチ、海鳥を見学するクルーズ[vii]など観光の魅力にもつながっています。

海産物などの加工品の工程に触れられたり[viii]、鮭を実際に触れるお祭り[ix]があったり、漁師をはじめ地元の人々の魅力的な話が聞けたり[x]、沖合に浮かぶ漁火の美しさを見る[xi]ことができるのも、知床、羅臼町ならではです。

海から始まり陸や空につながる知床の生物の多様性が、食や祭り、伝統文化など人の営みに直結している[xii]ことを、来訪者は体感できます。

i 菊地慶一 (2004)「流氷 ~ 白いオホーツクからの伝言」響文社 . p. 278.
ii同上 .
iii斜里町立知床博物館協力会 (1994)「知床の人と自然」郷土学習シリーズ 17 斜里町立知床博物館協力会 . p. 23.
iv『読売新聞北海道支社編集部編 (2015)『海と森のドラマ 知床 オホーツク回廊を行く」響文社 .p.24.
v斜里町立知床博物館編 (1999) 知床の鳥類」しれとこライブラリー 第 1 巻」北海道新聞社 . pp. 80-125.
vi読売新聞北海道支社編集部編 (2015)「海と森のドラマ 知床 オホーツク回廊を行く」響文社 . p. 24.
vii 知床羅臼町観光協会 (2000~)「観光船」(https://rausu-shiretoko.com/ocean-tourism/).
viii知床羅臼町観光協会 (2000~)「ツアー・アクティビティ」(https://rausu-shiretoko.com/main-menu/learn/).
ix同上 / 羅臼町ホームページイベント一覧 > 知床らうす産業祭 羅来楽 (https://kanko.rausu-town.jp/spots/event/53)
x北海道観光機構 (2025)「羅臼の奥深さ、五感を刺激する没入型体験」(https://visit-hokkaido.jp/adventure-travel/traveltrade-press/news/20250212_sustainable_03/).
xi羅臼ブログ第 3 回「羅臼の海は眠らない」(2019). (https://www.shiretoko.or.jp/report/2019/11/4856.html)
xii斜里町立知床博物館協力会 (1994)「知床の人と自然」郷土学習シリーズ 17 斜里町立知床博物館協力会

7 ルサの強風やそこからの景色に代表されるような極端な天候や急峻な地形は知床ならではの山・川・海そして太陽の繋がりをもたらし、人間の五感すべてに訴えかけてくる。来訪者は五感を開放し、能動的に動く力強さを得ることができる。

Steep terrain and extreme weather conditions, such as the strong winds of Rusha, combine to create interconnections of mountains, rivers, sun and seas that are unique to Shiretoko, appealing to all of the five human senses. Visitors here can open wide their senses, gaining a power that leads to action.

知床は山・川・海が近く[i]、火山活動が生み出した断崖絶壁など急峻な地形[ii]と、そこから生まれる極端な自然現象が存在します。山から海へ吹き抜ける「ルサ（ルシャ）のだし風（ルシャモン）」[iii]と呼ばれる強風や、羅臼岳から吹き降ろす「羅臼おろし」[iv]など強風という自然現象に名前がついているのも特徴です。

日本で一番開通期間が短い国道「知床横断道路」[v]も急峻な地形という特徴を表す代表格とも言えます。霧、吹雪など天候の不安定さは緊張感を抱かせますが、それ自体を楽しむという感覚が育まれます。この地で生き抜いている海鳥など動物・植物を目の前で見ること、人間がここで生きていくために必要な知恵・技術に触れることにより、生命の力強さを学ぶことができます。山・川・海の近さから、山と海の恵みを享受し、同時に体感することもできます。「海抜0mの高山」とも形容できる地形、息を飲むような絶景と、荒れ狂う強風は、来訪者のそれまでの世界観を崩し、野生を呼び覚まします。

i 斜里町立知床博物館協力会 (1989)「知床半島の生い立ち」斜里町立知床博物館協力会 .p.42.
ii同上
iii羅臼町百年史編集委員会 (平成 13)「羅臼町史 第 3 巻」羅臼町長 辻中義一 p.23
斜里町立知床博物館協力会 (1985)「知床の気象」斜里町立知床博物館協力会 . p. 7-11 (強風について)
または : 読売新聞北海道支社編集部編 (2015)「海と森のドラマ 知床 オホーツク回廊を行く」響文社 .p.74. (ルシャおろしについて)
羅臼町副読本「知床学 (改訂版)」編集委員会 (2023)『私たちの知床と海」羅臼町海洋教育推進協議会 .p.10.
iv 栂嶺レイ (2007)「知床開拓スピリット 梅嶺レイ写真集』星雲社 . p. 75
または斜里町立知床博物館協力会 (1985)「知床の気象」斜里町立知床博物館協力会 . p. 7.
v北海道観光機構 (2022-2025)「知床横断道路」(https://www.visit-hokkaido.jp/spot/detail_10406.html)
活火山 羅臼岳 第 26 回特別展 . p.14

8

極めて厳しい自然の中で「りょう」を生業とする漁師と猟師は、長い時間をかけて紡いできた誇りと共に、潮の匂い・血の匂いにまみれて生きている。「りょう」から食卓まで境界線がなく、来訪者は生命を五感で味わう体験ができる。

Confronting Shiretoko’ s extremely harsh natural environment, there are those who follow the ageless vocations of fishing and hunting. Enveloped by the pungent aromas of the sea and the blood of their catch, they work with a sense of pride gained through long years of dedication and endurance. There is an unbreakable connection between this work and the bounty on our dining tables.
Visitors can have all their senses stimulated as they experience their connection with life.

知床では、生活者の日常が来訪者の非日常ということが際立っています。厳しい自然の中で生きていくには命がけの部分があり、海の漁師と陸の猟師ならではの知恵と気質があります。一人ひとり、やり方の違いやポリシーがあるように、その手法は独自の文化にまで昇華されています[i]。例えば、知床の、特に羅臼側の海、根室海峡は火山活動により深海となっており[ii]、深い海の地形とそれゆえ多種多様となっている魚介類に合わせた漁師の技術[iii]があります。そして、知床に暮らす漁師や猟師は、自分たちの手を汚したものでお腹を満たすことで、初めて生命を感じることができる、ということを知ります。

市場には魚が上がり、海鮮工房では鹿肉やトドの肉が売られています[iv]。それらは新鮮で美味しいだけではなく、厳しい自然の中で生き抜く漁師と猟師の知恵を買い手に想像させたり、自然の中で獲られたものが自分の口に直接入るという安心感にもつながります。

こうした過程を知り、鮮度のいい魚や肉を口にすることで、知床で生きる漁師・猟師の営みを体感することができるでしょう。

i 一般社団法人日本昆布協会「世界自然遺産知床 羅臼昆布漁」2023.1.27(https://kombu.or.jp/column/5862/SEEDS] 2014 NO.224
ii羅臼町史編集委員会 (1970)「羅臼町史 第 1 巻』北海道目梨羅臼町 p.12
iii知床の漁業 特別展 p.4-32
知床の人と自然 郷土シリーズ 17.55
iv 羅臼漁業協同組合 直営海鮮工房 (2025)「商品一覧 (えぞ鹿トド肉)」
(https://www.jf-rausu.shop/shopdetail/000000000194/?srsltid-AfmBOoqp-R8dy-H5G1UsFnHOYZHIV2c3RpMDSE0TPmDUq1Q6SDsP0SbL).

9

オホーツク文化から続く、自然と密着した四季折々の極めて特徴的な暮らしがある。来訪者はさまざまな景色・食事・人の営みを楽しむことができ、訪れるたびに知らない体験ができる。

the ancient Okhotsk culture, is unique, closely connected to nature and linked to the change of the seasons. Visitors can enjoy diverse scenery, food, and human activities, which provide new experiences each time they visit.

知床には、はるか昔のオホーツク文化時代から現代まで続く、自然と密着した暮らし[i]があります。それゆえ、四季で変わる景色、四季で変わる食べ物（魚介・山菜）、四季で変わる動植物、四季で変わる人の流れが極めて特徴的です。特に海の中は夏と冬ではにより20～21度の温度変化があり、海の中でも四季が存在します。[ii]来訪者は国後島からのぼる朝陽の位置や風向き、海の中の変化や渡来する野鳥の変化[iii]だけでなく、沖合や港で働く漁師の姿やテーブルに上がる旬の魚など、[iv]様々な角度から春夏秋冬を感じることができます。登山やカヤック、ダイビングなどのアクティビティ、市場の競りなどの産業文化、オホーツク文化などの歴史を体験できたり、魚介・鹿・山菜・昆布・ウニ、場合によってはトド・ヒグマまで食することもできたりします。

四季によって表情が変わることは、来訪者をリピーターにする強い要因であり、来訪者は、訪れるたびに知らない体験を手に入れることができます。

i 平河内 毅 (2018)『丘に眠るオホーツク文化」斜里町立知床博物館協力会 p.6-26.
ii国土交通省 気象庁 (2025)「沿岸域の海面水温情報 根室海峡」(https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyo/series/engan/engan105.html).
iii斜里町立知床博物館協力会 (1998)「こんなに多様な知床の鳥たち」斜里町立知床博物館 . p. 1-3.
斜里町立知床博物館協力会 (1986)「知床の鳥』斜里町立知床博物館 . p. 16-21.
iv NHK for school「太陽高度の季節変化」(https://www2.nhk.or.jp/school/watch/clip/?das_id=D0005401818_00000).

to be continued

2024 年度に開催したワークショップにご参加くださった皆様、改めて心より感謝申し上げます。
斜里、ウトロ、羅臼と、知床の 3 つのエリアでそれぞれ 3 回の計 9 回実施したワークショップでは、エリアごとの特色を活かした貴重なご意見が数多く集まりました。たとえば、「農業」や「漁業」といった産業文化の魅力、「ありのままの自然の魅力」、「自然とともに営む暮らしの価値」など、多岐にわたる視点から知床の魅力が語られました。

また、「流氷から生まれる生態系の価値」のように、エリアを横断し、知床半島全体を表現するような価値についても深く議論することができました。

今回のワークショップを通じてまとまった知床の価値を、「4 つのテーマ」と「9 つのストーリーのたまご」として本ブックに掲載しています。これらを基に、2025 年度には地域の価値を本格的に「見える化」した「ストーリーブック」を完成させる予定です。

さらに、このストーリーブックを地域でどのように活用できるか、具体的なアイデアを募る場も設けていきます。宿泊施設のスタッフやネイチャーガイド、観光施設のスタッフなど、地域で活躍する多様な方々にご協力いただき、実践的な活用方法を検討していきたいと考えています。

私たちは、ストーリーブックが完成すること自体をゴールとは考えていません。むしろ、地域で積極的に活用されることによって初めて、その真価が発揮されると思っています。

今後も、地域の皆様に主体的に関わっていただけるよう、意見交換の場やイベントの開催など、様々な工夫を重ねてまいります。

知床の魅力を未来へつなぐために、ぜひ皆様のお力をお貸しください。
引き続き、ご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

発行：2025 年 7 月
環境省 釧路自然環境事務所